

明治大学政治経済学部  
西川伸一ゼミナール機関誌

# BEYOND THE STATE

第20号



2019・3・26

巻頭言・『BEYOND THE STATE』第二十号刊行に寄せて

西川 伸一

私のゼミでは二〇一九年度の三年生が二五期生になる。もう四半世紀になるのか。頭頂部が薄くなるはずだ。そして、ゼミ機関誌である『BEYOND THE STATE』（以下、本誌）は二〇一九年発行号で二十号を数える。いずれも切りのいい数字ではある。そこで、とりわけ本誌の二十年を振り返ってみたい。

記念すべき第一号は一九九八年三月の発行である。私の巻頭言の最後は「1998年1月12日 雪の日に」と結ばれている。いまのゼミ生が生まれたころである。この巻頭言はゼミのHPで読むことができる（「History」から入る）。本誌発刊の経緯についてはそこに書かれているので、繰り返さない。ただ、創刊号の実物は私の研究室に来てもらうか、明治大学中央図書館か国立国会図書館に行かないと手に取れないので、ここで少し紹介しておこう。



表紙はこのとおりである。まだ大学マークは制定されていなかったもので、校章が付けられている。判型はB5判で、両面コピーしたものを簡易製本した。二七四頁もある。というのも、サブタイトルが「卒業論文集」とあるとおり、第四期の四年生八人全員の卒論全文を掲載したためだ。一本だけ原稿用紙に手書きの原稿がある。これだけで六〇頁にもなる。私は一九九八年三月末よりイギリスへ在外研究に赴くことになっていたので、一九九七年度は四年生しかいなかった。

巻末に「第4期西川ゼミナールプロフィール！」として、ゼミ員各自の氏名、役職、住所（超個人情報！）、そしてコメントが載っている。私のもあった。「現在の心境…子育てに疲れています。最近6時間以上、ぐっすり寝てないなあ。最近覚えたひそかな楽

しみは競輪観戦。夜、母子が寝静まったあと、撮っておいたビデオをちびちびやりながら見るのです」などと書いている。一九九七年一月に長女が生まれたばかりだった。勉強もしないで何をしていたのか。

第二号は二〇〇一年三月刊である。第一号から三年も時間があいたのは、在外研究明けの一九九九年度に第五期生を募集してゼミ再開となり、彼らの卒業に合わせて作成したためである。この号から判型はA5判に変わり、印刷所にデータを入稿して製本してもらった形を取った。四年生は卒論要旨、三年生はエッセイといういまのスタイルはすでにこの号にはじまる。

巻頭言には「この三年間に世の中も大学も、そしてぼくの身の回りも大きく変わった。大学には驚天動地のリバティタワー「正しくはリバティタワー」がそびえ立ち、明大のイメージを一新した。インターネットを見せながら授業をしていると、妙な陶酔感にとらわれることがある。昔は…などと言う話はしたくないが、明大製「恥ずかしい誤字です」の学習環境は飛躍的に向上したと喋っていいだろう」と書かれている。

リバティタワーは一九九八年後期から使用を開始しているので、もう二〇年が経つ。ちょうど本誌の歩みとほぼ重なる。一方、巻頭言には「ぼくの身の回り」の変化について具体的には書いていない。実は二〇〇〇年一〇月に次女が誕生した。彼女がいま大学受験の真っ最中というめぐりだ。

その後は毎年順調に発刊され、卒業式が行われる三月二十六日に卒業生に卒論返却とともに贈呈するのが吉例化している。より細かく分析すると、私の一人称は第一号と第二号では「ぼく」であるが、第四号(二〇〇三)以降は「私」が使われている。四〇歳を過ぎて一人称もおじさん化したことがわかる。印刷業者を変えたので、判型は第六号(二〇〇五)を境にB6判になっていまに至る。第五号(二〇〇四)になると三年ゼミ長が表紙装丁の役割を担い、第六号(二〇〇五)からはゼミ長が選んだ写真が表紙を飾るようになった。第二号(二〇〇一)からは口絵として卒業生の二年間のゼミ活動を振り返る写真が掲載されて、ビジュアル化が進んだ。そして、次の第一三号(二〇〇二)でようやく本誌名のロゴが確定した。当時の三年生(二七期生)に絵やデザインが得意な学生がいたので、彼女に頼んで作ってもらった。

ところで、三月上旬に本誌の校正作業を行い、終了後に追いコンを開くのは第二号のとき以降ずっと変わらない。ただ、その校正作業の前に有志で映画鑑賞をするようになったのは、第二三号の時からである。二〇一二年三月二日に『ゴジラ』(一九五四)を観ていた。単なる娯楽映画だろうと高をくくっていたら大間違いで、とても感動した覚えがある。

上述のとおり、本誌は国会図書館にも納本している。請求記号(Z71-N194)も付いているので所蔵されているのはまちがいない。だが、どのように保管されているのだろうか

か。二〇一二年度前期の校外ゼミ(六月一日)では国会図書館を訪れた。館内を參觀させていただき、一般の利用者は入れない新館地下深くの書庫も見せてもらった。その際、担当された職員の方の気遣いで、本誌の所蔵場所にも案内された。本誌が整然と並べられていて、とてもうれしかった。いまなら即座にスマホで撮るだろう。

明治大学の専任教員の定年は七〇歳を迎えた年度末なので、私の場合は二〇三二年二月である。そこまで勤務できれば最後のゼミ生は三六期生で、彼らの卒業要旨が掲載された本誌最終号は第三三号になる。二〇三二年に二〇歳になっているということは、その期のゼミ生はすでにこの世のどこかにもういる。そこに巻頭言が書けるように健康には気をつけたいと切に思う。というのも、昨年一月に鼻出血が止まらず救急車のお世話になってしまった。

政治経済学部には一〇〇前後の専門演習ゼミがある。とはいえ毎年ゼミ機関誌を刊行しているゼミで、ましてや二十号を超えるゼミはまずあるまい。それが私のささやかな誇りである。

二〇一九年一月三〇日 冬晴れの日に